

日本記者クラブ会報

第165号
1983年
11月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二二(代)

クラブ功労者を処遇

明年の新年互礼会で公表

十月三十一日午後二時から第二十六回総務委員会、引きつづいて三時から第六十九回理事会が開かれ、かねてから懸案となっていたクラブ功労者に対する処遇を急ぎ、一月の新年互礼会員懇親会の席上で公表できるように具体的な手続きを進めることとなった。

日本記者クラブは来年十一月一日に創立十五周年を迎えるが、すでにこれほどの歴史をもつクラブとしては、クラブの発展に寄与した理事長、副理事長、各委員会の委員長、委員、あるいは草創期の功労者などに対して、しかるべき処遇の方法を考えてもよいのではないか、という

意見が会員のなかから出ていた。

クラブ定款第三章会員の項に、「この法人に対し、特に功労のあったもの、及び日本記者クラブ賞受賞者で、理事会の議決を経て総会で推薦された個人」を、名誉会員とするという規定があるが、この日の総務委員会では理事長経験者を「顧問」、その他を「終身会員」としてはどうか、また法人会員社に在職中のいわば現役の人は対象とせず、退職後に処遇を考えるべきである、などの意見が出た。

この案件は引きつづいて開かれた理事会にも追加議題として提案され、審議の結果、「顧問」あるいは

「終身会員」の制度を定款に加えるとなると、定款改定のための総会を開く必要がある、そのことを含めての手続きや具体案については総務委員会に一任し、明年一月十九日に開催される新年互礼会の席上で処遇を公表できるよう準備を進めることに決した。

会員増で上半期黒字

同理事会には昭和五十八年度上半期の仮決算も報告されたが、本年四月から九月までの六か月間の収支予算対比では、収入の部で約八十六万円の増収、支出の部では八百六十五万円ほど予算より上回った。

増収の主な理由は会員がふえたことによる会費の自然増で、支出が超過したのは日本プレスセンターへ前家賃で七か月分すでに支払っていることによる。センターへ支払う借料、共益費、空調光熱費などは月額約一千万円にのぼるので、これを六

か月分までで計算すれば予算内に十分収まっていることになる。その他の支出増は会報発行費で、講演記録版をすでに三回発行していることによる。

一月十九日に新年互礼会

昭和五十九年の新年互礼会員懇親会は一月十九日(木)午後六時からプレスセンター十階ホールで開かれる。席上、昭和五十八年予想アンケートの結果が発表され、最高得点者の表彰が行われるほか、企画委員会で作成中の昭和五十九年予想アンケートの問題も発表され、解答箱が用意される。

また全会社の協力を得て行われる恒例の空くじなしの福引もあり、多数の会員の参加が望まれている。会費三〇〇〇円。

十一月一日現在の会員状況

法人会員	一四四社
基本会員	六三〇人
個人会員	一、一〇二人
法人・個人賛助会員	五八社
特別賛助会員	一七二人
名誉会員	七四人
計	二〇二社 一、九九〇人

とっておきの話

トインビー家のお茶



中村 貢

内容的には歴史・宗教・欧州ものが多く、アジアものとくにベトナム・中国・日本に関する論文はきわめて少なかった。

そこで博士にインタビューをし、でき

本でいうマンション群のひとつの四階にあった。

鉄格子を開く古風なエレベーターを降り、ベルを押すと、老博士がじきじきにお出迎えた。質素な応接間で、前もって手紙していた質問にテキパキと答えてくれ、あとは隣の狭い書斎に移ってお茶となる。

熱い熱い紅茶を、これも老夫人がじきじきに運んでくる。温めた牛乳を先に入れてから熱茶をそぐミルク・ファースト、というやつだ。それをすすりながら、塩っぱいビスケットをポリポリ、というのがトインビー家のお茶であった。

何度か続くうちに、オン・ザ・レコードのインタビューだけではなく、お話を雑談的にかがうオフレコ形式でお邪魔してもいいですか、といってみた。それも許され、随時に訪問できるようになった。日本から来訪された財界有力者に、博士との会談をご紹介、いたく感謝されたこともあった。四年間にどれほどお邪魔したる

朝鮮戦争で国連軍に従軍、五〇年代と六〇年代の二度にわたるアメリカ勤務、五月革命でパリが燃え、ソ連のタンクが、プラハの春を踏みこむころのヨーロッパとめ。想い出はいろいろにあるが、忘れられないのは、なんといってもロンドン在動中にトインビー博士の知遇を得たことである。

アメリカではリブマン氏のケイガイに接する機会にも恵まれたが、トインビー先生のそれとはまるで比較にはならぬ想いだ。このことは数年前、国際電電の機関誌「KDD」にちょっと書かせていただいたので、どなたかのお目にとまったらう。だからもはや「とっておきの話」とはいえないかも

しれぬが、そこをお断りしたうえで、同業諸兄にあらためてお聞きねがいたいと思う。——十五年ぐらい前のトインビー流の国際情勢「お見通し」がどうだったか、というお話なのである。

朝日新聞のヨーロッパ総局は、当時もロンドン「タイムズ」の社内にあった。ただ場所はいまとちがって、テムズ河畔のプリンティング・ハウス・スクエアにあった。狭い構内には別棟で、高級日曜紙「オブザーバー」の社屋もあった。同紙にはトインビー博士が定期的に寄稿し、特約関係の朝日新聞はそれらの論文を外報部が自由に訳載できた。だが

れば、なかば定期的に、彼のアジア観を故国に伝えたいと考えた。「タイムズ」や「オブザーバー」の口添えもあり、願いはついにかなえられた。

総局のイギリス女性秘書は目をかがやかせて同行をせがみ、はじめはチャタム・ハウス（王立国際問題研究所）や文人墨客の集まるアセニウム・クラブでお会いした。そのうち「出るのがおっくうになった。うちへきませんか」と老先生がおっしゃるようになった。

願ってもないことだ。いそいそと、オークウッド・コートのとインビー家へでかける。東京でいえば西郊にちかい、代々木上原といった感じの、閑静だが、古いフラット（日



トインビー博士(右)と筆者。右下にトインビー氏のサイン。

うか。日記をつけていなかったのが惜しまれるけれども、一問一答で紙面に載ったもの、雑談風に聞いたことを記事に使わせていただいたものなど、黄色くなったスクラップ・ブックをながめながら、随分いろんなことを、失礼にもきいたものだ、いまは思う。

聞き手の素質のせいだろうか。歴史や文化に関するものはほとんどなく、もっぱら商売大事と考えた、生臭い国際政治の問題ばかり

だったのが恥ずかしい。それでもいまになってみれば、さすがに大先生だと脱帽させられる語録が多い。

「米国はベトナムで、ひどい火傷を負ってしまった。センセーショナルな敗北を避けるためにも、遠からず自ら撤退の道を選ぶだろう」

「ベトナムは結局、共産主義的な政権のもとに南北が統一されてしまるだろう。しかし中国とは一線を画すると思う」

撤退という消極的利益だけで満足する。しかし中国が昔のような君臨的態度をみせれば、ベトナムはソ連の力を借りてもシッペ返しをするだろう。米国を利用するこ

とさえありうる」

「中国は本当の大国になったら静かになる。いまあまりにも狂暴にみえるのは、かれらの弱さの発露だ。しかし賢明にも無限の工業化、都市化の方向にはまりこんではいけない。その意味で日本とくらべ、まだまだ大きな行動の自由がある。建設や成長にあたっての実行可能な調和を見いだすチャンスにも恵まれているように思う」

「欧州は東西にわかれていても、史上まれにみる平和に恵まれていて、長い流血の歴史からいうと、たまさかの安らぎかもしれないが、それを可能にしたのはイギリス、フランス、ドイツがクセイム・サイズでクセイム・タイプになったからだ。東西ドイツの再統一など今世紀中は無理だろう。人口六千万の西独と二千万の東独が合体して強力無比な八千万のドイツ国家が出現すれば、欧州のバランスはたちまち崩れる。英仏はむろん、東西両独の背後にある米ソも、決してそれを望んではいない」

いまにして思えば、博士の「お見通し」はまことに透徹したものだ。お得意の中東については、ことのほか有益な話をたくさん聞いた。だが中国については、いささか甘かったのではないかと思う。かくも早く米中和解や日中国交が実現、しかも中越戦争が起これたりしようとは。また、日米や米欧経済摩擦がかくも激化し、ソ連の八方ふさがりもこんなにひどくならうとは。さすがの先生にも意外だったのではなからうか。

あの世へ「電話」がかけられたら、と思う昨今である。亡き博士のご冥福を祈りたい。

なかむら みつぐ氏略歴 大正一〇(一九二一)年、兵庫県生まれ。大阪外語卒後、軍務を経て昭和二年朝日新聞社入社。朝鮮戦争従軍、ワシントン特派員、ワシントン支局長を経て外報部長、ヨーロッパ総局長、編集局長、研修所長を歴任。五〇年から五八年まで英字紙「朝日イブニングニュース社」代表取締役社長。現在、同社顧問。三十九年ポーン国際記者賞を受賞。

カールビンソン佐世保寄港

ワーキングプレス

世界最大で最強の軍艦、米原子力空母カールビンソン（八一、六〇〇トン）が十月一日から五日まで長崎県佐世保港に寄港した。反対闘争は盛り上がり欠け、ローカルな問題に終わったが、米海軍が誇る最新鋭空母の日本初寄港は、世界平和と日本の防衛を考えるときに大きな意味を持つものだった。

日本の西の果ての佐世保は対馬海峡、朝鮮半島に近く、戦略的に重要な位置にある。政府はこの『西の果て』と『戦略的』な地理的条件から、原潜（三十九年）、原子力空母（四十三年）の日本初寄港地として、在日米海軍司令部のある横須賀ではなく、佐世保を選んだ。原潜は四十一年から横須賀にも寄港しているが、反発の強い原子力空母は佐世保だけ。このため佐世保は『汚いところを踏む足の裏』ともいわれている。

佐世保の記者は、足の裏にいたるため、国際関係が緊張す

ると、世界が注目している米艦船が寄港し、貴重な取材体験をする機会を得る。三月の原子力空母エンタープライズ寄港のときは港内停泊中の取材だけだったが、カールビンソンでは入港前、沖繩沖を航行中に乗艦取材ができた。日帰りで約四時間の艦内見学だったが、実際に艦載機の離発着訓練を見て、空母の役割を肌で感じる事ができた。約一分ごとに発進、着艦を繰り返し、戦闘即

”足の裏”で考えたこと

池田文夫

（長崎新聞 佐世保支社編集部）

応態勢をとつての厳しい訓練だった。垂直離着陸しかできないソ連のキエフ級空母と比べて格段の差だ。カールビンソンが太平洋艦隊に配属され佐世保に寄港したのは、西太平洋における米ソ軍拡競争の一環。米国と同盟関係にある日本は、エンブラヤカールビンソンを受け入れたことで、米戦略の中に組み込まれたといえよう。

こうした中で、最も関心を持って

取材に当たったのは、平和運動のあり方だった。十五年前のエンブラ闘争は、ベトナム戦争への日本の加担協力反対を主張した人道的立場からの闘争だった。しかし、戦域核が開発され、限定核戦争も起こり得る現在の情勢は、十五年前とは比べられないほど、日本が戦争に巻き込まれる危機にあると思う。それにもかかわらず、反対闘争は低調だった。

佐世保は旧海軍の鎮守府があった

関係で保守的色彩が強く、自衛隊や米軍に好意的な土地がら。一方で革新陣営はこの二十年間、原潜、エンブラ闘争な

どを経験、非武装中立論の石橋社会党委員長のお膝もとでもある。世論が右傾化した中で闘争を見守ったが、集会やデモなどのスケジュールを消化するだけだった。総評や社会党など中央が動かず、地元では闘争を続けることだけでせいっぱいだった。それでも石橋委員長は運動の継続の大切さを強調し、今回の闘争に一定の評価をしていたが、寄港したときだけの一過性の運動や集会、

デモという従来からの運動パターンだけでは草の根の広がり望めない。

ところで最近目立つのは、米国の核は自由のためで戦争の抑止力、ソ連の核は侵略的という意見。原水禁大会が分裂する原因になった論理の裏返しだ。核兵器に『よい核、悪い核』があるはずはない。被爆原紙の記者がカールビンソン寄港で痛感したのは、政府や闘争のリーダー達も含めて、日本全体が核軍縮など具体的な平和への取り組み、努力が足りないという事だった。



佐世保港に停泊中のカールビンソン

三宅島噴火

ワーキングプレス

十月三日、午後三時二十分頃（気象庁発表は三時三十三分）始まった噴火は、翌四日の午前中まで続いた。流れ出した溶岩は島内最大の集落、阿古地区を直撃。阿古地区の九〇%にあたるおよそ四百戸が溶岩に埋まった。昭和三十七年八月以来、二十一年ぶりの噴火である。

私たち取材班が三宅島の三池港に着いたのは、四日午前四時半すぎ。噴煙も何も見えないが、足元の桟橋に積もった火山灰が「災害」を実感させた。

「見たまま」を現地からの第一報として、朝のニュースの中でレポートすることが、私たちに課せられた「至上命令」であった。島を一周する都道は溶岩や火山灰に埋まり、各地で寸断。火山性地震が続ぎ各地で崖崩れも起きていた。どこまで行かれるのかも分からぬまま、とにかく走り出したのだった。

だが、その前に「足の確保」という難問があった。島内のタクシーは全部で二十一台。しかも、このうちの何台かは、確実に溶岩と火山灰で使用不能となっていた。これに対し、現地入りした報道陣は少なくとも五百人。

東京を出発する前に五台の車だけは確保してはいたが、とても足りる数ではない。あとは、取材基地に決めた民宿の主人に頼んで近所や友人

島民との共感の中で取材

小森 隆 夫

(日本放送協会 社会部)

から可能な限り車を集めてもらえない。マイクロボス、トラック、ライトバン、ありとあらゆる形の車が集まった。動きさえすればそれによかった。

足りないのは車だけでなく、それを運転する人はもっと不足した。土地感があるがなかるうが運転するしかない。警察も交通違反の取締りまで、手が回らないのを奇貨として免許証不携帯の「罪」を犯した取材

者も少なくなかったはずだ。

四日の夜には電話が使えなくなった。溶岩流で島と本土を結ぶ市外電話回線が破壊されたからだ。原稿送りも、ラジオ番組でのレポートもできない状態となった。

それでも、執拗にダイヤルを回しつづけると、なぜか東京につながるものがあつた。いったんつながれば「しめたもの」である。必要があるときまで、世間話であろうと、何でも

ろうと、何時間でも、しゃべりつづけて電話を確保する作戦だ。ところが、用件さえ済めば「受話器は置くもの」と固く

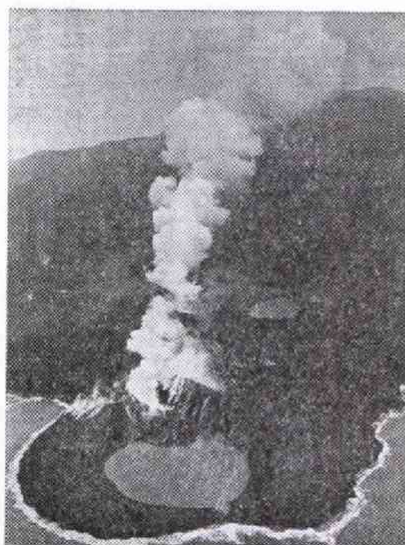
信じている。「心ないデスク」が多いのは、我がNHKばかりではないだ

ろう。また、ダイヤルを回しつづけるしかない。五日になると水も使えなくなつた。水洗便所も使えない。

東京では電話付きの車での取材も珍しくなくなつた。そんな中で、三宅

島での取材では、島の人たちの苦勞の極く一部だけでも、共に体験できたような気がする。そして、何よりも島の人たちが「テレビ」を信頼してくれたことが、私たちの励みであった。新聞が一日遅れで配達される三宅島では、テレビ、ラジオの災害報道が頼りである。家を失つて三宅小・中学校に避難した人たちは、被災地の様子を写し出す画面をくい入るようにつめていた。

私たちのインタビュイーにも快く応じてくれた。この人たちにとにかく、「死傷者ゼロ」のニュースを伝えられたのは、何よりであった。



新島地区の海岸にできた大きなクレーター
(写真=共同通信提供)

10・12—ロッキード判決

ワーキングプレス

「10・12ロッキード判決」の取材は、七年におよぶ法廷取材の総決算であった。事件は五十一年二月に発覚し、公判は一年後の五十二年一月に始まった。公判回数は判決までに百九十一回を数え、その間数々の法廷ドラマが繰り広げられた。

さる六月下旬、東京地裁刑事一部の岡田光了裁判長が判決期日を「十月十二日」に指定した。その時から「10・12」に向けての取材準備が始まった。

戦後最大の疑獄といわれ、「総理大臣の犯罪」の成否が問われている事件だけに、その判決は、政界に計り知れない衝撃を与えることが確実に予測された。従って事前の企画ものも、裁判に関するものだけではなく、政治、さらには戦後の疑獄史の分野にも、取材のほこ先を向けざるを得なかった。

しかし何といっても、「判決」そのものをいかに取材し、

どのような紙面を作るかが、司法記者に課せられた最大の任務だった。ロッキード以外の事件でも同様だが、裁判所というところは、他の役所と異なつて、マスコミ側の取材に對して、極端な制限を加える。このため司法記者クラブが中心となつて、八月の夏休み時期から裁判所当局と取材交渉を開始した。これに對し裁判所側は、元総理が被告人ということもあり、警備上の理由から、

制約下での速報戦

主なものだけでも三十項目の取材制限を加えてきた。廷内の記者席の位置はもちろん、原稿を運ぶオートバイの運転手がつけるリボンの位置まで指定された。

このような制約の下でも、夕刊早版からパーフェクトな紙面を作らなければならず、読売の場合、当日裁判所に、五十六人の記者、カメラマン、機報部員、オートバイ運転手らが動員された。司法クラブでの常駐

十四社、非常駐七社の動員数は、千二百十人にもものぼった。またその日臨時に設置された取材用の電話は、百四十一回線になった。

午前十時きつかりに、判決主文の宣告が始まった。岡田裁判長とクラブの間で、五被告の主文言い渡しは全部終了するまで廷内の席を立たないという約束があったため、主文宣告後、同時スタートの速報戦が展開した。特に田中元首相に對する主文を他社より一秒でも

滝鼻卓雄

(読売新聞社 社会部)

早く伝えるため、テレビ各局の競争は熾烈を極めた。七階の法廷から四階の記者室までかけ降りる時間を少しでも短縮するため、早朝から途中の赤電話を確保し、受話器を数時間にわたつて握り続けたTV局、学生時代陸上競技部員だった記者に競技用のシューズをはかせて走らせたTV局、七階から一階の階段のすき間(わずか五センチ)に、タコ糸を張り、一報のメモを落下させた通信社。新聞も含めて各社とも、苦心の速報策がとられた。

このようにして地裁内記者室や外

のTVテントから「田中実刑」、それに続く判決理由要旨、弁護団、検察側のコメント、被告人の入廷雑観などが、文字通り洪水のごとく全国に流れた。

午後二時過ぎ、田中元首相は三億円の保釈金を積んで地裁をあとにした。元首相の車を無線カー、オートバイ、ヘリコプターが追った。その喧噪を耳にしなが、夕刊のゲラ刷りがファックスを通して記者室に送られてきた。「10・12判決」報道大作戦は終わった。



実刑判決を受け、保釈金3億円を納めて地裁を出る田中被告

東京支社訪問

「まだまだ緊張の毎日ですよ。大韓機のブラックボックスも見つかっていないし……」

東亜日報東京支社長の韓甲洙会員は厳しい顔で語る。

九月一日——大韓航空機撃墜事件、十月九日——ビルマ・ラングーンでの爆弾テロ。続けざまに韓国は衝撃的な事件に見舞われた。

大韓機事件では、本社から社会部記者二人と写真記者一人が稚内に派遣された。実は、その時の写真記者李重鉉氏(34才)が、ラングーン事件で死亡した。

「優秀な写真記者でした。私が編集局次長時代に、他社から彼の引き抜きの話があったんです。それを引き止めたのが私。とてもつらいです」

と韓さんは声を落とす。
現在、東京支社は韓さんのもとに、鄭求宗特派員と事務職員の崔善行さん(女性)、そして運転手兼任の金光均さんの四人。大韓機事件では、崔さんも丸の内の大韓航空東京支社につめて取材にあたった。韓さんと鄭さんは東京での情報収集に奔走した。本社から稚内に飛んだ社会

部記者の一人は、一か月も現地に滞在し取材にあたった。

「日本語が出来ない記者だったので苦労したようです。それほど長い滞在になると思っていたなかったので、途中、東京から二度も送金しました」

東京支社は本社外信部と直通電話でつながっている。送稿にはこの電話とテレックス、そしてファックスを利用する。ファックスはこれまで韓さんと鄭さんの自宅だけに備えられていたが、「今日の午後、支社内にも設置されるんです」

東京からの一報が 夕刊輪転機止める

と、ここで初めて韓さんの表情がゆるむ。ちなみに一か月分の電話代は、支社で平均約三十万円。九月は鄭特派員の自宅だけで、五十万円を超したそう。

あの撃墜事件の時、稚内からの送稿は電話で直接ソウルへ。写真は、朝日新聞が稚内に持ち込んだ電送機で築地の朝日本社へ送ってもらい、それを新宿のKDへ運び、ソウルへ電送した。

「実をいいますと……」韓さんは九月一日をふり返る。
「あの日午前十時頃、某筋から、撃墜

みたいだ」という情報が入ったんです。すぐ直通電話に飛びついて、本社へ連絡しましたよ」

その一報で、夕刊刷りの輪転機は他紙よりも早く止められ、見出しも変更された。

「実は、九月四日の日曜日も、大変だったんです」と続ける。共同通信の社会部から突然電話で、「今回取材のため来日したお宅の特派員が行方不明になったんですか?」。

「びっくりしましたよ。全くのデマだったんですが、どこでどうなったのか、韓国のテレビ局が、テロップで流しちゃうたらしいんです」

今度の事件では、サハリ強制着陸、特派員行方不明と、東京支社もふり回された。

事件の全貌がほぼ明らかになった七日には、鄭特派員の司会で、青木日出雄航空評論家、竹田五郎元統幕議長の座談会を記者クラブの会議室で行った(支社はプレスセンタービルの八階にある)。

東亜日報の紙面に、東京支社発の記事が掲載されない日はない。記事量もアメリカの次に多い。特にいま韓国は科学ものフィーバー。コンピューター、ロボット、

ワープロ等への関心が高く、東京は絶好のニュース源のようだ。

東亜日報は、今年創立六十四周年を迎えた。四月には、中曽根首相との単独インタビューを成功させた。

「インタビュー記事は一面トップを飾りました。韓国紙での単独インタビューは、ウチが初めてです」

運転手を兼ねる金さんは、毎朝、成田空港へ前日の東亜日報を取りに行く。それを東京支社と中央郵便局へ運ぶ。中央郵便局から全国の読者へ郵送される。その数については、韓さんは笑って「秘密です」。在日韓国人、韓国関連企業、それに政府関係者も含め、かなりの数々のようだ。

(長谷川)

九月七日、記者クラブの会議室で行った「KAL機航路ミステリー脱線」座談会を掲載した紙面(九月八日朝刊)

KAL機航路ミステリー脱線 徹夜捜査



발견된 대피도遺體나 遺品은 남은법 노련한機長 김차카上空 통과도 의문 自動機장기 고난시기는것은 非常時難事. 不可解

3명이 위아가며 通過지 집入力失手는 사실상不可解

先月のクラブゲスト

長富祐一郎 大蔵省審議官



【三日(月)】研究会
「ソフトノミックスについて」 司会
平田真巳企画委員 出席
五七人

広海正光 通産省産業政策局調査課長



【二日(水)】研究会
「内需振興について」 司会 平田真巳
企画委員 出席 三五人

わが国の経済運営のあり方についての、大蔵、通産両省のスタンスの違いをきく。

石橋政嗣 日本社会党委員長



「大幅減税と政治の浄化」で野党の足並みはそろった。税調中間答申は「財源を明らかにせず、大幅増税を隠しており、インチキキさい」。

【二八日(火)】昼食会 司会 一木豊企画委員 出席 一一八人

前川春雄 日本銀行総裁



司会者「なんて間がいいんでしょという感じがすが、まったくの偶然です。実は総裁はソノコトで予定より三十分早く退席されます」。

総裁「私にとってはまことに間の悪いときで困っている。新聞があれだけ書いてあるので、公定歩合なんかもうとっくに下がっていると思っている人もいるかもしれない。下がったとして質問されても困るし、そういう質問に「まだ下がってない」といっていいのかわるのか……」。

山田充彦 日興リサーチセンター取締役(研究開発室担当)

「ピンチ乗りきりつつあるメキシコ、事実上デフォルトのブラジル」 【二四日(月)】研究会
「世界経済の課題(Ⅱ)―中南米の債務危機」 司会 平田真巳企画委員 出席 四三人



松下康雄 大蔵省事務次官



総合経済対策について、あるものは円安にききあるものは円高にきくというところで「暖房と冷房を一緒にかけているようなもの」との批判もあるが、長期で見れば「頭寒足熱ということでは合理的」。

来年度七千億円の所得税減税の財源については、「一時的な財源をもって減税という恒久的な措置はとれない。適切な財源を見出さなくてはならない」と発言、さらに景気回復にともなう法人税等の自然増収や税外収入も財源にはなり得ないとし、増税での財源確保を示唆した。

フロイド・D・シモムラ 米国日系市民協会会長



全米に会員三万人。初来日の会長も事務局長も日系三世。日米摩擦は日系人社会にも影響を。 【二五日(火)】記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 西山千 三四人

堀 和雄 警察庁薬物対策室長



なぜ日本だけがほかの薬物でなく、覚せい剤なのか。「多幸感があり気宇壮大になるらしい。ただ精神への作用がきわめて強く危険。通り魔的犯罪にも……」。日本人の性格や気性に合うのか。「終戦直後、復興時のヒロポンの乱用も影響している」。ヒロポンはギリシャ語で「仕事を好む」の意。最近、米国の暴走族の間でも少し広がっているらしいが、覚せい剤はもっぱら日本。

そして、薬物汚染をさかのぼってみれば、特攻隊や夜戦用の突撃銃や軍需工場の夜間労働者用とは……。 【二七日(木)】研究会「手のつけられない問題―覚せい剤」 司会 石山四郎企画委員 出席 二一人

ジョン・R・オベル IBM会長



【二七日(木)】記者会見 司会 友田鶴企画委員 通訳 小松達也 出席 一一一人 次号に質疑応答の全文を掲載予定



▼九月二十四日から二十九日まで、ワインバーガー米国防長官の訪中に同行取材しました。記者団は、米

三大ネットワークとケーブルテレビ、AP、UPIなど約十社、三十人。日本人は私ひとり。現地の特派員も撮影したことのない、軍隊の写真を撮る機会にもめぐまれ、二十八日には、鄧小平ーワインバーガー会談をカバー。鄧氏は待機していた記者団ひとりひとりと握手。五年前の来日時より、白髪がふえた感じだが、相変わらずの超ヘビースモーカー。

ところで、私、目下禁煙決行中、今日(一〇月二七日)で五日目。会報紙上をお借りして、禁煙宣言をします。ガンマプレス 栗田 格

▼今度、国際連合ベオグラード広報センター所長に赴任することになりました。会員の皆さまには、大変お世話になりました。ありがとうございます。十月三十日に離日、ニューヨーク経由でベオグラード入りの予定です。三、四年はベオグラード勤務になると思います。

後任は、元毎日新聞の中村恭一氏です。今後ともよろしくお願いいたします。国連広報センター 小田信昭

第45回会報委員会

昭和58年10月5日(水)
日本記者クラブ小会議室

講演記録版と十月号の反省、意見交換の後十一月号の編集方針を協議した。

また、一月号の『新春随想』の執筆を岩佐直喜氏(中日新聞参与)に依頼することを決めた。

出席 深谷委員長。井出、斎藤、安延の各委員。

第105回企画委員会

昭和58年10月13日(木)
日本記者クラブ大会議室

司会を担当した委員から、前回企画委員会以降の行事報告があった後、事務局から、コール西ドイツ首相、胡耀邦中国共産党総書記の記者会見の予定について経過報告をした。またレーガン米大統領については、記者会見が実現するよう、新井明理事長名文書で再度要請を行った旨を報告した。

シリーズ研究会「ソ連」「軍事技術」「減税問題」のそれぞれの担当幹事から、今後のテーマと講師について報告があり、これを了承した。

その後、見学会について検討した。
出席 藤村委員長。本島、森本、友田、

広瀬、有賀、石丸、高野、武藤、中沢の各委員。

第75回会員資格委員会

昭和58年10月18日(火)
日本記者クラブ小会議室

十一月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 水上委員長。赤松、滝沢、内藤、上野の各委員。

第3回施設運営委員会

昭和58年10月25日(火)
日本記者クラブ小会議室

ハンドブック「クラブ利用に関するお願い」の改定内容について意見を交換した。

出席 小林委員長。宮地、山崎の各委員。

第26回総務委員会

昭和58年10月31日(月)
日本記者クラブ小会議室

①功労者に対する処遇、②クラブ創立15周年記念事業、③パキスタン大統領からの招へい、の三件について審議し、それぞれ理事会へ提議することを決めた。

また、恒例の理事会と各委員会委員との合同忘年パーティーを十二月十九日(月)午後六時から開催することとした。

出席 渡辺委員長。酒井、東、山田、泉

の各委員。新井理事長、中江、常盤の両副理事長。

第69回理事会

昭和58年10月31日(月)
日本記者クラブ大会議室

決定事項 ①昭和59年度日本記者クラブ賞を前年と同様に実施する(12ページ参照) ②昭和59年新年互礼会員懇親会を明年一月十九日(木)午後六時からプレスセンターホールで開催する、③クラブの功労者に対する処遇について、明年の新年懇親会で披露できるように、最終案の作成を総務委員会に一任する、④クラブ創立15周年(明年十一月一日)を記念して講演会やパーティーなどを開催し、経費は特別積立金を充当する。具体案の作成を関連委員会に一任する、⑤パキスタンのハク大統領から、去る七月の記者会見の返礼として理事長と事務局長を招へいしたいとの申し出があり、これを承認。詳細を大使館と事務局とで詰めることとした。

報告事項 ①昭和58年度上期仮決算、②役員交代、③各委員会報告。

出席 新井理事長。中江、常盤の両副理事長。渡辺(襄)、藤村、酒井、小林、太田、岩濤、田中(義)、岡本、田窪(滝口代理)、南里、東、吉岡、深谷(憲)、成田、山田、泉、前田の各理事。

紹介 会合

- 3日▽欧州記者研修
計画参加者歓迎レセ
プション(協会 阪
田秀会員) 4日▽
スペシャル番組「大
アマゾン」完成試写
会・パーティー(テ
レビ東京 三神正人会員) 5日▽カ
ペラ・タクシー記者発表会(東洋工業
平岡建二会員)▽中東・アフリカ記者
サヨナラ昼食会(FPC 安延久夫会
員)▽パノン南オーストラリア州首相
記者会見(豪州大使館 武田吉朗会員)
6日▽フォーリン・プレスセンター創
立七周年パーティー(河村欣二会員)
▽「医食同源」放送五十回記念パーテ
ィー(テレビ東京 三神正人会員)▽
会社説明会(西日本新聞 藤吉保徳会
員) 7日▽対談——小林宏治(日本電
気会長と江尻進新聞協会顧問(信毎
菊地俊朗会員)▽在京九社編集局長会
(協会 宝子山幸充会員)▽NEED
S-I-O予測説明会(日経 立花明
正会員) 11日▽エレクトロニクス
新能 記者会見——十一月二日、代々
木室内競技場で、科学万博五百日前
「前夜祭」のセレモニーとしてレーザ
ー光線、シンセサイザーを使用した新
能が開催された(原文振 林弘会員)
- ▽二火会(日本農業 木村睦会員)▽報
道資料研究在京小委員会(協会 山田年
栄会員)▽銀杏クラブ——東京(帝國)
大学新聞編集部OBの集まり(殿木圭一
会員) 12日▽第十回海外日系新聞年次
総会(川島克巳会員)▽放送番組向上委
員会(矢野輝雄会員) 14日▽芸術祭参
加番組「未知なる反乱」試写会・パーテ
ィー(TBS 吉永春子会員) 15日▽
ワシントンプレス婦人会——元ワシント
ン特派員の夫人たちの集まり(毎日 上
田健一会員) 17日▽世界食糧デー懇親
パーティー(信越放 田野信夫会員)
18日▽日本インダストリアル・フォト協
会(JIPA)総会・懇親パーティーII
記念講演講師・安達健二(東京国立近代美
術館館長(日本工業 石川基会員) 19
日▽ドキュメンタリー「ザ・チャレンジ
ャー」試写・記者発表会(電通 新貝博
会員)▽ニューメディア専門研究会(協
会 田所泉会員)▽中国社会科学院新聞
研究学者代表団歓迎レセプション(内川
芳美会員) 20日▽東京愛媛クラブ例会
(愛媛 堀定省会員)▽スペシャル番
組「ザ・貴族」完成試写・記念パーティ
ー(フジTV 土井泰彦会員) 21日▽
関東六社総務責任者会議(神奈川新 内
山陸雄会員)▽池田憲蔵さんを囲む会
(中川鋭之助会員) 24日▽日墨交流史
- シンポジウム(伊藤一男会員) 25日
▽広告掲載基準事例研究会(協会 権
田萬治会員)▽電力記者クラブOB会
(内海裕土士会員) 26日▽アジア太
平洋通信機構(OANA)代表を囲む
会(共同 渡辺孟次会員) 27日▽し
もく会(ABC協会 相川誠一会員)
28日▽研究報告会「放送とことば」ゲ
スト・金田一春彦、芳賀綾両氏他(放
送文化基金 野村忠夫会員) 29日▽
徳島クラブ(徳島新 谷田匡会員)
会員がクラブ施設を利用して行った
会合の主なものです。十月の総回数
は一〇一回でした。カッコ内は申し
込み会員名。



中国の新聞研究学者代表団の歓迎レセプション(19日)

ゴルフの会

第三十八回ゴルフ会は十月二十八日、都留CCに会員十八名が参加して行われた。都留CCは過去、雷雨、雪、雨、と天候にたたられ放しの因縁のコース。四度目の挑戦で初めて終日好天に恵まれた。

この日の庄巻は、同組でプレーした広岡会員と楠田会員のBG(ベスト・グロス)争い。一回り半若い楠田会員が第一打で40、50メートルの差をつけるが、ホールアウトするとスコアは同じといったホールが続ぎ、前半九ホールを終わって広岡会員44、楠田会員43の一打差。午後も白熱したマッチプレーが続ぎ、結局、両者とも45で終了、BG賞は楠田会員が獲得した。しかし、ハンデ差1と年齢差により順位は広岡会員が上位で二位となった。

また、地元山梨日日・小林会員がご夫妻で参加し、今後に好ましい先例を示すもの、として全員から熱烈歓迎を受けた。当日の成績は次のとおり。

優勝・村上重美(事務局) NET71、二位・広岡知男(D) 75、三位・楠田正夫(法費) 75、BB・嶋袋浩(琉球)、BG・楠田88、NP・広岡、本田路威(朝日イブ)、森垣辰巳(サンテレビフォト)、吉川真澄(プレスセンター)、DC・村上。

プロフィール

十一月一日付人会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

昭和59年度「日本記者クラブ賞」の

候補者をご推薦ください

◇取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、候補としてご推薦ください。

◇本賞はいわゆる「特ダネ賞」ではありません。候補者の活動の時期、期間を問わず、ジャーナリストの優れた典型を示す実績、人物が評価されるものです。

◇当クラブ会員および法人会員の社員すべてが候補資格者です。他紙他社のジャーナリストの方でも積極的にご推薦ください。

◇受賞者は昭和59年度のクラブ通常総会の席上で顕彰され、名誉会員となつていただきます。

◇これまでの受賞者は、長崎新聞・松浦直治氏(49年度)、東京放送・古谷綱正氏(50年度)、毎日新聞・松岡英夫氏と日本テレビ・池松俊雄氏(51年度)、朝日イブニング・芝均平氏と日本放送協会・磯村尚徳氏(52年度)、朝日新聞・松山幸雄氏(53年度)、熊本日日新聞・岩下雄二氏(54年度)、朝日新聞・疋田桂一郎氏(55年度)、読売新聞・村尾清一氏(56年度)、東京新聞・須田栄氏(57年度)、名誉会員(辞退)、共同通信・斎藤茂男氏(58年度)です。

◇推薦手続きなど詳細については、事務局へお問い合わせください。

IBM・オペル会長が地球儀を寄贈



十月二十八日(金)、日本IBMの竹中善広 報統括部長と中島利文 広報担当が、クラブへ 筆置事務局長を訪ね、オペル会長からの記念品を贈呈した。

にマサチューセッツで製作された、皮製の地球儀で、アメリカは十三州、オーストラリアもまだニューホーランドとなっている。

なお、ジョン・R・オペルIBM会長の会見は、前日二十七日(木)午前に行われ、司会の友田錫企画委員からは、オペル会長に対して、クラブからの記念品として万年筆が贈られた。

クラブ訪問記

10月11日/リチャード・フランシス英国放送協会(BBC)専務理事 10月13日/R・グナシソグム マレーシア・プレス・インスティテュート 10月20日/P・J・ラオ ユネスコ・アジア太平洋地域広報官

ゲスト・カード

FPC中南米記者研修六名 修五名/カーン・ムハマド・リアズ(パキスタンTV) /ヒラリオ・モリーナ(フィリピン国営通信社)

会員の著書(ご恵贈いただきました) ヨーロッパの新聞(上) 江尻 進・渡辺忠恕・阪田 秀

労働問題入門 江幡 清
現代政治の潮流 芳賀 綏
テレビのなかの外国文化 川竹和夫編著

秋の叙勲 荘宏会員(放送文化基金)が勲三等旭日中綬賞、清水誠一会員(新潟放送)が同瑞宝賞をそれぞれ受賞されました。

《展覧会の招待券》 朝日新聞社から「三輪休和遺作展」の招待券をご恵贈いただきました。

十一月の行事

- 17日(木) 午後2時~3時30分 シリーズ研究会 『世界経済の課題』(Ⅲ) 細見卓海外経済協力基金総裁 クラブ記者会見室
- 22日(火) 午後2時~4時 シリーズ研究会 『軍事技術』(Ⅳ) 鷹尾洋保防衛庁航空幕僚監部技術部長 クラブ記者会見室
- 25日(金) 午後3時~5時 シリーズ研究会 『ソ連』(Ⅳ) 佐藤経明横浜市立大学教授 クラブ記者会見室
- 26日(土) 午後(予定) 胡耀邦中国共産党総書記記者会見 プレスセンターホール (10階)

会報委員長 深谷憲一
委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二